環海異聞 壹 止

和書門 類
二七四一九 號
八九 函
一四 架
一六 冊

内閣文庫
和書 類
二七四一九 號
一六 冊
九 架
一八五 函

内閣文庫	
番號	和 27419
冊數	16 (16)
函號	185 130

国立公文書館
National Archives of Japan

環海異聞巻之十五

雑事

寛初漂着せしオニテレイツケといふ濱を始く見たりしオロシイア地より属せしは「セリコフ」と云人なり此人諸国遍歴せさる所なしといふムスクワ産れの者なりイルコーツカにて去ル卯の年病死六十二三ときけり仍て也するちの為を係せしは

日本政府図書
明治十二年購求

三十年もおのれなりしに此セリコフといふ者八十三
四年より十七八年までキセロフが父某が代に馬牽
の事にしたる者なりしが利発者にて限なく出世
し遂に商賈方の番頭となりキセロフが手代
オホーツカ カミシヤーツカ北海港仕出し此舟に乗
至りし所にてオホーツカを見出し船をよせ
て容子を伺ひしに夥多海獣の漁猟ある場
所と見定められ海帆此上にて次第物語りし王上(カミ)へ

も告訴して再ひ発帆しこの海を懐中に入む
とこの地にありぬ時に島人見馴ざる舟と人見
ことを怪しみて漁猟に用る銛(モリ)杖百本を擲ちて
船中へ打かけしが舟子見これを防き得許多(アマタ)
怪我せし者も出来大にあくみしにセリコフ謀
略をめぐらしこれをといひ諭し若様するを
得て遂に八今のことくまゐなりて帰服せしむることに
なりしが此辰八年西より舟往来して交易に

擬（ナソラ）ひ御々の形を共へ数多の獣皮を貢納せし
むかしより遠き地に役所を建て役人を置き
二ヶ年ツゝ一遍ツゝ交代し貢物を送り獣皮を
奉ることゝなせり
おセリコフは此海上の儀大功よりて王土合
俸禄官職を賜ひ家富ミ栄へ今のキセロフ氏
肩を比ふ程の富豪となす。スド。ゑリヨニの事上
なりしと人々噂せりとぞ　スドヱリヨニハ百万と

いふ程なり然れともキセロフは是ハ願の家なれハ
日家の事を離れす諸の商売並に方の諸
為へ遣る交易代物等もキセロフおもに致
譲りしに近年五千余程当年にて病死せり故
商人中当れ居らすしてキセロフか替ひ益々盛
なるをそ知らえ大商中当を省むとしけれとも
セリコフ在世の内ハ彼ハ手なりありて是を悟り
各門謗のさゝやきてありしかセリコフ死去の上ハ悍ル

所有しとて何迄も申合せ唐音にキセロフをはその
中間と懐きより此方後キセロフゟ仕出しの船
ミ光年くみて坊遠方ゟ又近年オホーツクより
北アメリカゟ仕出し船帆せす三年を経
ても行方知れさる等ありて尋ね合はしきも多し
皆彼奸人とものため事も亡と欺ひ恨み悲しき
とぞ

此度漂客等を十アツカより送りて却而海帆
せし舟其に船頭もセリコフが其の名有りしとイル
コーツカへ出帆せし此は已にセリコフ泉客とありしとて
其名ても語りき追々ニ及度毎ニ八あひより 今ロチカ一家
隣に女子壱人ありけるそて語ある積の名有し夫に
今ハ後家となりて以スクワに川誠し居候すと報
此女所身持きて多く此貨も大くうらひ為せりとの
噂なり知れとも夫の切より其上よりの究竟も
引續き語る自也是を名の事と申也

ナアツカ七十歳のヲロシア人ハ五六十才と見ゆる人
先年此島へ来て漂流せし時漂人より蒙りたる綜（モリ）
恩の恩ありとて禮をおもして見せ又セリコフ七十
才かし勝きて死せりときけハ島の俗ニ属せしも
善き事ニハあらしと見ゆ
カミシヤーツカより松前の方第十八目の漂来て
ヲロミイ見ゆ所ホとなりて之島の蘭奥をワシライ
といひし此人セリコフと共ニ諸色を遺せりし人

なりとぞ
大麦（エチメニ）・挽割りして食ふ汁ニスラを加へ煮食ふ
常ニハ食セす何ぞある時はたまく用ゆ麦食ハ裸麦（ハダカムギ）
セメ（ヤリ）の蕎麦（ケレプ）を用ゆ四黄毎に豊作の時ハ銀貨十
八銭凶作の年ハ五十銭よりる銭迄売ル豊成の
年ハ大凶作なりしかハ二石八十銭より三石銭迄売
買せり小麦（セニイミノ）は豊の年ハ二十五銭頗なるに
凶の年ハ大小麦ともこれニ準して價高なりし

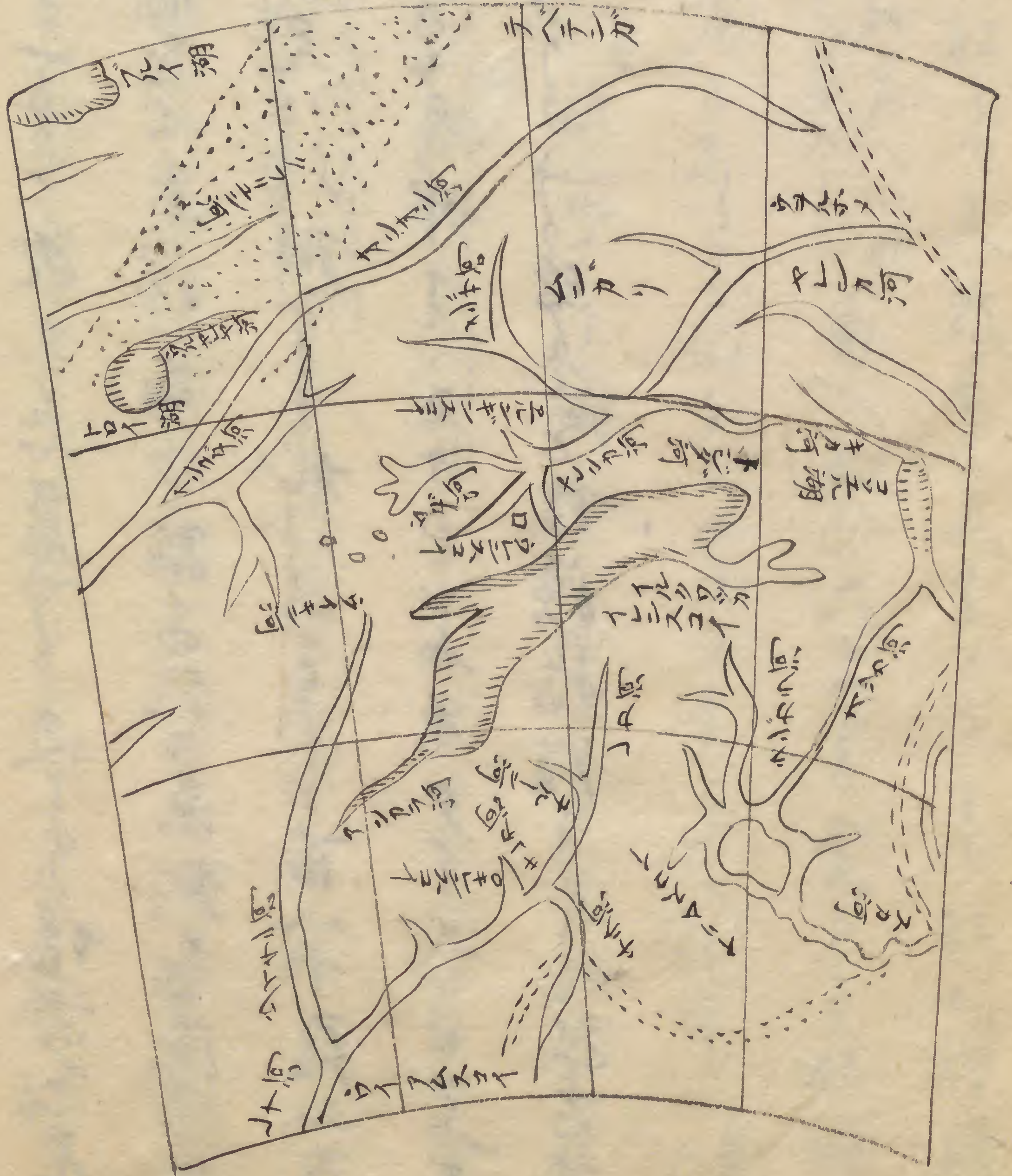
扨小麦も粉にして並様に作り然る物に製し
常には用ひず蕎麦ハ挽割にして煮る之亦の
穀類よりハ一二割も價高し挽割蕎麦粉の類
水車此所を用ひ毎挽するなりイルコーツカより
都（ミヤコ）府の府中カラスナヤリツケの邊より風扇
を用ひて見しに路傍にて商家仕舞てあるを示して
見て見たりけるより
露営とも家商キセロフが許に借宅してありし門

サーモーリフ湖（バイカル）といへる大湖へ漁猟にきをする
あり先年も人をも加へりて行きてり此湖水の漁
場とえ イルコーツカより南にあたりて千里程あり
これ彼里数なり又七る里程ともいふ日本里数にてハ二百里にハ足らざるべし イルコーツカ近傍の諸
地ハ此湖より漁する魚類を専ら用ゆ キセロフ大金
をかし主立て他の商人中為とはに彼湖へ網
打の猟に出たりこれある戊の年此る所なりしを
三月なりしか先年常も人数に加はり南所より

川船にて人数七十人をのりて船之艘漕出せり大船の内へ小船をもつみ入し之南へ向ひ六十里登るこれ湖水の水の方よりあふるゝ所にてコフライといふ地なり寺言「ニコノチチコトトボリシといふ此所より湖水へ舟を入是をれより東の方へ向ひ山傍へ湖畔を引舟まして七百里行きアニカリツケ国よ見るアニガラ河南邊の湖畔なるへしといふ所よ着此所雅ニ高山にて遠く高山なり諸人の行り或ハそてり峡岨を越へて此所よ舟を牽きつけたるも故所を発船して三

十月を経て着岸せり夫より場所を見立て網をはき帯留中数千の魚数を漁り得より網ハ引網なり此引の長さ百八十尋二百ひろある魚を中才ハモリといふ魚タイメンといふ魚鯪鰒ねずりうの背皂を塩漬樽詰まして数百箇となす

右ハオロシイア本版地図全景より写す所なり
此東荒後の結統を参考せし イルクワツカと
記せる所イルコーツカなり 二を傍の川より東へ置り
船まて出来し如くし 西中れ大湖ハ即バイカル
一名ザーモリ なりムニガリ と記せるハ蒙古なり
唐山境の方なり レナ河ハ「ヤコーツカよりイル
コーツカへ渡る也流なるへし これ九平ヰ此
島をおし 示して 覧す所之



拔乙蛤鹿湖漁猟圖

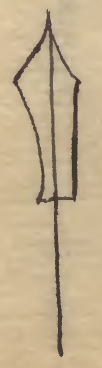
又場所を出て網して　オシヤラレナと云へる大魚
二尾をとりしに一尾大なるハ八十二貫目あり
これ又臓を截ち切り桶に浩塩漬にして置きしに
シヤライと唱へて明礬に似たる物あり（按に消石の類是に）
塩と拌き合せて魚を漬れるなり此の大魚ハ此
二味相合のおかげにやされハ塩氣肉裏に透徹せす
とある此樽にて漬け舘へ送るハ數年経ても腐敗す
ることなきと云此所にても才ヽモリ魚の類も又鰯く

網に入りしかとも塩を入るる事限りあれハ見を失ひ
其網をも集め大塩漬の桶を遠く舟に積て入湖
帆せしハ六月にして其所の漁を了す
此湖畔に（八十二コス）といふ種族の人数あり此魚彼
等か住所地面也（舟を覆ふ皮数千枚又百五十
枚を運ひとしかし其迄て網を打ちり
ニコライ河源の事などにあつることなきの湖畔より水を
渡てあるき此南畔まで八湖上六十里ありこれを渡り

山靼に隣りぬれハモンカリツケ蒙古の方の隣地へのみ
陸中なりといふ冬月湖水一面に氷りつめたるときハ
ケタイスコイ漢地より商船の通路氷の上を渡り
来るといふ又それよりイルコーツカとの川筋も氷り
はりつめる故氷上を往来し通路の便利なりと
いふ暖氣の時の通用ハ南の湖邊山際を船に
沿ひ上りて二千余の湖畔へ加へ三百里を経て
ニコライ河邊へ来る通路をなりとぞ支那境ハ

七百里ありといふ　程二百里余有へし
此湖水色赤し中島もあり竪長サ波里法にて一千
里（湖水の大さ之）ありといふ此岸ハ海に添しと之（図に水色を彩れる変赤きを通しり誤なるあられ）
此湖畔の上にウエリホノアンガリツケといふ土地の通俗に
住む夷狄ハ即ドンゴスなり此處定れる家居なく
時々所々に居所を移すこと家作といふもの八木材を
たてならべ外より獣の皮を引包し囲ひとすること厳（コヤ）
の形に横に木を架し自在といふつきおとしけ魂

をはなし灶を設る地を黄食ふる食物ハ魚獣虫蛇
のたくひまて時に依りてハ火食をはすといふ麁乳
汁を飲あり他の牛酪を用ることし且麁を制し
使ふ事するのことく器り沙き又あるをも沙す此族
射いるハ記て妙を好り弓ハ木にて作り長サ四尺
五六寸を此の諸々の射かさてハあちこちまて矢を
後の方へうけて射発つ其の鏃ハ



如此様にて長サ四寸許あり矢ハ鳥羽三枚付之

常に矢筒を脊負て行くみちにも弓に妙を好しと
いふ天に飛き虚空に翔る鳥を矢に端より又落き
えあるにも雲中の鳥にあたり射ことある鐵度
はありてもあやまりすこれなきハまし見て目を
驚るもせりと
ソーボク貂は止白星地方の名産なり裁に此鳥を
捕むりの玄上好なり（上品の皮その価七十枚程なり）極湖水の鳥ハ
織くたる雪山をりてもきる涼き渓ソーボリこそ作よいつあり

トンゴス是を見すまして能射者をいふオロシイア
の所地とありし後年〻此事を貢す依て此貢を立
其のため且土地の者締りにアンガリツケ又はオロシイア
より役人二三人立勤ありし
トンゴスは異形の仏像を崇す皆銅にて作れり
又紙面に作りて祭り置く之アンガリツケに繍絵あり
其仏像等に彼矢鏃の又あるをも作るなり
トンゴス等ら衣服ハイルコーツカにて買ひ求め皮衣
并種類の衣服を着用す男女共に時〻イルコーツカ
へこれを調ふるために往来す
漁猟の者皆くアンガリツケに小屋をかけ居住せし
内ハドンコス等二三十人も来りたるもいふべく家を
作りて住めりこれハ此方にて漁りし魚類をもらひ
請んとしてなる也川網の手習に居人と相謀れバ手
習譲を請ふて相互に寄らしめす性懶惰且貪欲なる
者にて只貪るのみといひけりしと

此時弓を射て見せしに射術ハ甚て盛んなるよ
おもしろかりし
かくて皆これ仕也海帆を人とするにハ彼ドンゴス氏又
何方へか旅亭を移せり
アヒガリツケの内に海あり 名不少国を挙ず エガラ海あるこれ川
アモル 黒龍江 是即支那所謂といふ川に合しオロシイア領と
クタイスコイ 支那 の領分境をなすといへり
バイカル 湖より水源をなす川 長さ二千

五百里の間ヤコーツカに流るゝ川あり又イルコーツカに
流るゝ川ハニコライ右至湖中より出る口の下なり
スートボリツカの方へ流るゝ川有といへ共未詳なる川ゝも
あるべし
イルコーツカ滞留中いつれの年月ハ忘れたり日
蝕六分ありしか常なる事あり土地の人ハ之に気
付す従来なとまそハ測り知る事あるよしとや
インベラトリ 帝爵 帝號 の国ハ世界の中にケ所有一ケ所

の名ハ三ツ有り 一ツハ オロシイスコイ 魯西亜 二ツハ
ヤツポンスコイ 日本 三ツハ ケタイスユイ 支那なり
とぞ

茂賀抜 王一ツハ 入尓瑪泥亜(セルニニア) 欧羅巴(エウロツハ)洲ニ係る 一大王なり 和
蘭ニテハ ホーゴトイツ」又ドイチランド」といふ 有るへし
一名子イメツカ 魯西亜是ハ子イメツと呼ふ也
杜條都児格(ツルクエ) 魯西亜ハトレツコイストロツカ 又オトミンスコイ」といふ
應帝亜(インデア) 魯西亜 インゼイスコイといふ 亦帝号なりとぞあり
大莫卧児(モトゴル)といふ所 凡そ六ケ所有りと云 我
皇都なり

日本ハ異域ニ比すれハ土壌狭小也といへとも
皇統一世萬古不易帝爵の國跡にして
他の諸邦ニ優れること外域此を尊ミ畏
服する所以なり 往年ありし伊勢光太夫并ニ
此度の漂客等ニも彼国の人々常ニいふ
貴國ハ土地ハ狭少なれとも イシベラトリ此國
なりと称美せしとぞあり
先年光太夫等を護送し松前ニ来りし アダム

キリロイテラツクスマンは先年ベトルブルカにて病死
せしより其父キリセイチは去巳年都ベトルブルカよりの
帰途トボリツカより而にて病死せり此人諸々種々
異類を串さしにて干し或は塩へ漬けりと一種
学者なりしの噂ありしを告けり其子ラツクスマンの
死去ハ其後此事なりとそ

按するにキリセイチハ光太夫を厚く世話やきし
人ときこへり都へ公用にて登り此者同道し

女帝江拝謁の願をも致しつゝありしとそ学識
ありて兼て本草を好むよしにて此業王命を
受しとなり光太夫をオホーツカより送り来
りしにも亦採薬せりと異類をはしめし
のゝ沙汰なりしハ行云にて実ハ本草家といふ
事なるへし

外よりものをとる文字貴本甚く用貴なり何よ
よらす一切称なけく寄るなり

博奕ハ玉中甚く法度ありて私に戯むることを戒むるに
名をカルタといふ札あり弐十六枚あり男女の人の形ヶ
なとありカルタイケライといへハ呼さとうてといへる
なり日本にあるカルタも帰帆の時南亜墨利加(アメリカ)
ゟポロトカリ人此遊びを戒りこれハ全く我国に
あることゝ同し

按にポロトガリハポルチユガル　波尓杜尾尓我
邦にいふホルトガルともいふ　又弘く南蛮なり邪耶蘇教

法を弘め来りし国此国三つなる遊しカルタと云ふ牌ハ
都て牌(フダ)又圖版のことなり欧羅巴洲中通用の
牌なりしとそ今ハ諸国博戯の一名となりて通称
も亦唐へハ耶蘇宗旨傳へし奕具なるにや
往年当日人帰帆のとき此国帝より各帰りし彼時中ハ
都府にて作りしものなりしと也
此彼時中四箇あり皆獣を見せたるを謂ひ
しに其中一箇をとゝめ遺く三箇ハ皆返し

鋳たる茂質これを披き其内をみれは
Thodoyrey（トハイレイ） London 2068の月（二万六千八百六十四）
といふ数十字を彫り付あり其云ふれハ他ハ弁すべ
からすと云ともロンドン龍動（ロンドン）とあるハ漢叉利亜（アンゲリア）（アンゲツコイ）の
都府なりし故龍動（ロンドン）製の物なる事既に
夥しくあり全く漢叉利亜（イギリス）細工と見えたり
國人始て根付時計を持するは先きにありける也常に
自ら時刻を知るなり

漂人等新都の名をビゼルホルカといふか称しペトル
ブルカと呼びし由押てこれを質するに彼人ハペトル
ブルカと称するをビゼルホルカを誤りて（ヨコナニ）申す所
なりといひきなる故に然れ皆ペトルブルカと記せり
　按るに和蘭よりハピートルベルグといふ
ペトルブルカの都へハ諸方国の人集り居るといふ其中
地名を呼えしハ　タルタ　韃而靼（タルタ）　子イメツ　入尓瑪泥亜（ゼルマニア）
ガラニツケ　和蘭（オランダ）　アンゲリ　漢叉利亜（アンゲリア）　ダニツケ　芽那瑪尓加（デニマルカ）

スウェトツケ　雪際亜（スウエツシア）の都凡七十七ヶ國の人ゝ来り
集り雑居するを許さるゝ所に住む者とある事幾千
といふ事を知らず是となり是等と引合せられ参る
こともなく又服飾大抵似たる者なれば知りわかつべき
様もなし但出仕せし途中にて黒人（クロボウ）を見かけしより
其れもオロシイアの服を着し懐には根付時計を提
て居たりしが其面ハ黒漆を塗りたるがごとく光き黒
なるに目はきて間ひ居てかくと知りしなり此黒人

のをハアラツプといふよし申せり其後通詞も更
く知るよしなし数日在留せし　ガラフといふ官人の
居館に逗留せしに　イノスタンシノ・コレシゲといふ大役
ありしが是ハ右の通詞役の者にて居るよしなり
イノスタンシノを外国コレシゲハ役所ともいふことにて
外人の衣食住の都何事も此役所より取扱ふよし
申せり

按に黒人ハ南アメリカの人なり人々アラツプ

といひしハ世名ハ又ハ其種族の名ハ詳ならず
とせず
諸国より使者といふ　ホスラニシカ　来り居る様子なり何の子細
にて来るや知らず何れも旅者とのみ見えし　リユニ
ソフカラフといふ国相の領主　イシパン　伊斯把尓亜（イスパニア）の
王　王とコロリといふ　より来れ使者なりといへる者逗留せしハ
足へより来る国ハ外国の使者なりといへるハ拾五六
人を足へたり其国の名ハきゝても留めず

上官の人々ハ国語を話す多くハ子イメツの
語を話ひ常にハ能く諸国の人々と通弁する
者なりとぞ但し国王れおそへハオロシイア語を
使ふと聞けりそれガランツケハ阿蘭陀なり子イメツと
ガランツケとの詞をかへしの違ひなりといふ
抑も子イメツハ入尔瑪泥亜（ビルニニア）なり和蘭（オランダ）より
ホーコドイツ即ガランツケ　和蘭の宗国なり
和蘭語ハホーゴトイツより轉し来る也なれハ

なかるへし

漂客曰子イメツはオロシイア隣の地にて
旧都の北邊にあらすと遠く離れたり　光太夫も其地に
至りを去りし後接す子イメツはオロシイアより
ゼルマニアと称して別の名なり　漂客曰西今此姓ハ
子イメツより婚姻せりとぞ先日族魯西亜國
然して又帝号あれ出あれハ在るへし
志譯・説曰　ムスクワ京城ノ郭外入尓瑪尼(ゼルマニ)
亜國久所居ノ府アリ造営美麗ニシテ

人居稠密ナリコレヲ名ケテ「スロクウョダイン
セムスカ」又「ニーメツカ」ト号ス云々　漂客曰ハ
此華を步ねく本地と呼ひしなるへし　蓋
子イメツは即ち此ニーメツカなる事疑ひなし
しゼルマニアの一名にユーメツと称するなり
其地況まて及ぶ
スウェイツケ　雪際亜と以ふ其土地の宜さ而ハ皆オロ
シイアより攻め取りしを今れ新都ペートルブルカも

スウヱイツケの原地なりしを[illegible]おされて自ら
寄るスウヱイツケに今ハオロシイアより給米を送りき
すとりよ嘆とさりけり
先年先た丈等を送り来りし時献上品の内鼓徒
よ新井の大長刀をつくされし由是を彼えり来
作れ新兵器と称し國宝の一となし置よし
イルコーツカよりも是略をきけり
漂客等曰オロシイアよりも阿蘭陀をガラニツケと呼ぶ

又新和蘭をノイローランゼと云彼國版の地圖中よりも
太十郎携へ来りし世界地圖竝小冊中をみるに
和蘭 ГОЛЛАНДІЯ.（ゴルランド）
新和蘭 НОВ ГОЛЛАНДІЯ.（ノウ ゴルランジヤ）
是ヲロシイア文字
オロシイア讀となり
「Г.」ハ暜西亜ニテ「ガ」ト云厄勒祭亜國ニテ「ガムヤ」
ト云フ和蘭ニテ厄勒祭亜ノ字ヲ註セル書ニ「Г.」
即和蘭ノ「Г.」ゲ ガ ゴナリト見ヘタリ因て思ふに和蘭の
事をガランツケと称すとりよすれハ「ガ」「ゴ」一声の轉

ゆゑんか
順帆の節大洋中にてさへハ世界北と南とへ来れバと
て従ひとかゝり此定どもへも酒魚を欲せし又起りく
船をり数百里已りてさゝげ赤帯へ至れバ是らく
従ひし事再回に及へり至爾とエクワトル」といひし故
の外暑き所なりとぞ
抑エクワトル」ハ羅甸(ラテン)名和蘭にハミツテルレ井ン」
と云 中線ノ義 即赤道なり世界図を閲するに

和蘭ハ亜弗利加(アフリカ)海にある赤道直下の海
上に居へ再回ハ亜墨利加(アメリカ)海上にある赤道直
下なりこれまた一大奇事といふべし 欧邏巴(ヨロツパ)
洲の人世界を航海する者赤帯とするものとい
ども一回ハ赤道下を通船せし事再回に及
へるハ希にあるべきことにて阿蘭 普西亜人も
比度の船旅初ての通行なりとぞ比度の船
人等新都北川口を発しカナスグへ出大船

に乗り廻を「オヽストゼイ」と呼る所より開帆し
て「カシケリ」〈諳厄利亜〉ヲ船をらせ夫より南へむかひ
加那里亜嶋〈亜弗利加洲〉ヲ立よりさてと出テ暫らく
して赤道直下を經。南亜墨利加ヲ向ひ「プ
ラジリイ」「ヨカテリナ」ヲ船を寄せ猶月岸为それ
より同海の出先キ「ヒユールランド」といふ所の岬を
与りけ海を右にして渡海し再ひ赤道下
に出川港より遙の洋中「セルケイス」嶋に船を

泊め水を加ふ「カナスグ」より是迄彼里数十六千
里。〈我里法四千三百七十零里三六八なり〉ありといふ又北亜墨利
加も在るに右にして夫より八東北へ舞し
亜細亜洲の東北隅「カミシヤーツカ」の湊へ着し
又南に向ひ日本東南方北洋にある海上
をとき通りて亦西國九海の遙隅を經て
歸りして天下四大洲方の遠洋を悉く経
歴せりといふへし　和漢古今未曾有の

奇なりこれに比すべきものあるまじきなし　彼人ゝ
昔よりは度々大経歴を渉ねてありとすれ
とも航海を常とするの俗尚已に順帆は日本
の西北海を過り蝦夷諸島を右に見て再ひカ
ミシヤーツカに到り乗出れは環海一周して再ひ
日本の東南の沖を通りて支那の南海を渡
り廣東の港に舟をよらせ印度（テンヂク）百爾西亜（ヘルシア）・亜
蝋比亜（ラビア）海をさし通り亜弗利加洲の南辺を

こえて三度赤道下を過ぎ行きもとの
海路を廻りて西北に向ひ本国へ帰るよしの
大業なれは是て其果とするもの是るまし
きれ但欧東方諸国の人にありては定辞て子
年に下低挨無き所の一大奇事なりこれ唐山
天竺とこゑる国よりまくは是てなき所なるへし
嗚呼奇なるかなこの船路古代未曾有のことなり
従来我日本舟子颶に逢ふて支那（ハラ）地方の諸

海よりいりしときハ西南方　安南天竺方角の
諸地へ漂着せしものハ是迄數四百人を記次
壬寅年此比伊勢国光太夫等ハ北海の僻
海へ漂着し夫より魯西亜の内地へ入り西
本国欧羅巴洲の都府よりも数年を經て
回船せしハ未曾有の奇事なりしに此度ハ再ひ
原路を取りて　オホーツカ湊より松前へ回
着せしなり此度仙臺の漂客ハ亜細亜洲
より欧羅巴洲の都下より更に湊より出帆
して亜弗利加洲亜墨利加洲等の四大洲
を一周して数萬里の海路を渉りて
回船せしハ漢土日本ハ国より東方亜細亜
洲方のてハ古今上下未曾有の一大珍事
此實奇事といふへし
此度の私に献上の品と見へし大ニ感する仕合なれ
擬茶あり茶ハ様子にて記する紙の方ニ委くを記す

ものあり是を上せハ急に傍へて火光発す其上に人形
あり小筒の泆施を持せて立円に発火さ泆施へ移り
て玉を発川写とるなり又平盤の上に紙細工の
人形を伏せ並右仕無の市を廻せハ其人形起きて
踊る君ハ何とも以ひていかなる仕かけのおもや奇妙なれ共
なりと思ひけり

梅に和蘭持渡りの機器エリキレルテイト上よし
てこれ俗名にエレキテルと唱ふおもむきし人形

上泆施とうごかせするハ新意と荒へより

公邊呈書の中に載する献上物何れも異常珠
器此度となり一両年已来製造に五かり御出船
おゝ出来ありしるよし干中大浣四枚ハ是も長大
のおなり長以間許横も是文五尺程厚其なかり
裏ハ板法縁ハ金縁其草花の模彫りて色々飾
硝子浣大小平版ありムラくとして白石の板
又盤のやくきりしる模是献上おの臺にも用る

格子なり又ハ石を歴代の諸王の像を彫刻せる
ものあり

格よ「ムラムし」を和蘭にて「ニルメルステイン」石よ
して我肥後白島の白石の類とせり　白瑪
瑙の属なり

織物の巻ものも数箇あり「セイウチ」の牙ハ三尺より四
尺位の物まで六本もあり其外種々の物数あり
船中ハ大抵献上品の物の類種々本邦の品ハ
皆船中要用の具ありし交易品の物のみにてハ
一切なかりしといへり

漂流漂着の者を始として「オロシイア」内地へ入り
帰帆迄の間滞在の人と凡交且出会ありて容
貌言語も各異なる者を数多見しれハたのもし

アリオウトウ　初め漂着せし「オンデレイツケ」諸島夷族都名之先支ハ「アンオーツカ」といふ

オホーツカ　本邦の地名と初て着船せし湊之

カミシヤーダ　カムシヤーツカ人といふ

ヤコーテ　ヤコーツカ近傍の締地千程数の人と称していふ

ブラーツケ　イルコーツカ近在土着人孰無名

トンゴス　バイカル湖辺の人也

タルタ　韃而靼（タルタ）

ケタイツケ　唐山（ロラ）

チワシヤ　イルコーツカより新都との間にあるなりといふ所の地名

カメイカ　ムスクワ北辺の人

アラツプ　黒人（クロボウ）　アメリカ人なるべし

カルラ　小人　丈二尺四五寸あり

按にサモイデンといふ地方矮小の者なり　今ヲロシイア領となりしと云はれば土人なるや　イルコーツカより一日新蔵といふカルラといふ小人なるといふ者はかねて云ひたり　都にて使言レサノホツトの宅へ行きし時　友人の四しけ小人を使ひ来れるを　姓そ見たり　又尺近くに人をかなスタの私へもつれ来りし所　再三見たりと　世界中に小人国ありといふは昔より和漢の書にあるも　それとも未だ實否を考へず　和蘭にては　サモイデンの地人小人なりと詮議不思議よりして見るべき人目にあまり　姓そ邂逅（テアイ）せしは　これ又一奇事なり

スウエーツケ　雪際亜（スウエツシア）

アンゲツコイ　漢乂利亜（アンゲリア）

ハラシフースケ　拂郎察（フランス）　フランシッーツ

ダシワケ　第那瑪尓加（デナマルカ）

イシパシ　伊斯把你亜（イスパニア）

ポルトガリ　波尓杜尾兒（ホルトカル）

カナリワケ　加那里亜（カナリア）　イスパンの人往来して爪わとゐすといふ

ヱカテリナ　南亜墨利加（アメリカ）伯西兒（ブラーシリー）の内

マルケイス　アメリカの孤嶋

サンペイワケ　同　右二嶋北アメリカニ属するなし

右二十二類北亜墨利加（アメリカ）洲　吉田漂着のカンデレイワケ諸嶋ハ北アメリカ洲ニ属すといふ

亜細亜洲欧羅巴洲亜弗利加洲南亜墨利加（アメリカ）洲。

五方の人永と見分れり比類ニへこともなき異なし

魯西亜の人数ハいつれも丈高く髪膚赤く眼（メ）彩（サシ）ハさめ

色なりニ他此人ニのやうすハ委しく見とあず

止白里（シビリ）　加山より東北カミシャーツカ」ニとを出放す大洲ハ亜細亜ニ係る　の人数ハ丈短く

髪黒く眼も黒し

傘ヲ八本背ニて絹帛（キレ）ニてなる上ハ羽りの常人ハ

雨天の時ハシャワパ帽笠と羅紗の合羽を用ゆ羅紗
を能く雨をもちくものなり常に油紙ハ川より水氣を
よくしみてあふりけく干し置なり
檣（ホバシラ）を立て艫にて押す毎ハ日本に送りと定め日
本漂流人を都よりイルコーツカへ送り来る又
彼ハ帰りし役人衆ハ何しオレキサンダラといひし者皮
皮ハポポローチクときけり
袋を襷にかけく往来せり其袋の上にハ雙鷲
の国號を付けるものにし驛路の鑑札なといふものゝ

又是等ハ手まりにいふへきものにや道中預りて人これを見
て畏敬し何事も御手の迹を尊ずなりこれハ
メワタリ」おゐて合日ハ又是等是遠しものにや
糊（ノリ）の用を為すものハ膠（ニカハ）なきものゝ魚より取りたる
にて何とやらいふ魚の腸中に秘むるものありこれを
煮いたく用ゆ紙其外のものを接（ツ）ぐに皆是を使ふ
よく糊着するもの書状封じめハ赤色にて小さき棒
のやうく作りたるものを蝋燭の火にて炙り落して

塗りたるを其上に布を押すへし
按に是れ和蘭にブリーヒラツカ（出箔 蠟）といふものと
同物にて白蠟と松脂と合し黄色にしたるを
塗りしものなり
革（ツクリカハ）に八羊 バラニ 綿羊 ヤニニ 野牛（ヤギ） コジヨウ の三品
を作るに コジヨウ 別して宜し 鹿皮牛皮此二品
はすへて好き鞣し皮にて製しかたし日本にてハル
ミヤ皮と呼ものハ ヤニニと同物にて此度漂人等持
渡りし皮蒲団皮枕ハヤニニの皮也都て浪
花の枝に染め出せりと
去辰年彼暦数一千七百八十四年といひし年
女帝 エカテリナ 崩せられと ゴツクリ ペレスクウエリ
といひし是ハ天下様の事なれハさといふ事なりとそ コ
ツクリとも崇め称する事にいふ辞 ペレスノウエリ ハ帝
王此死去に限りいふ辞にて常人にハいはすとそ
按に崩御といふなるへし

凡そ新婚婿婦席へ出る時は其姉妹の閨房の外に
伺ふ所にして其新婦出れハ襦袢を出して外にある
もの〻渡す其者是を改めて其者にわたしとすべき
ものあれとこれを其行事の日里方へ送る里方にて
大なる儀に婿も礼に似たる事親嬰ひ迎へ婿其事
是へ呪を借けて礼とならし又立てる事親の口卜已ハ
口を合ス是常式なりとそ並又告りしもなきれハ
礼にハ因より似たるもなく婿ハ家不快新婦の事

親ハ其外の氣の毒かるといふ是れ其新婦語あり
同新婚の婦年の長幼の論なく必ずといふ
事不審せといひけれハ
答彼人恥かしき日本撰より生ひ立の変れる事
多けれハ初縁の者ハいかにもかくあるへきやと
いふは未だ信しかたし按に本朝古礼の膝ベ
脂とて初夜に洗ひし数よりして年も長けても
初縁を経するの悲しさや

オロシイア本国焼なりといふ此外あまた数多の器に金とや
きはめて見るものなりし物数種リユニシプフガラフ此余見
えりき
豕と馬とは羼丸（キンタマ）を取去る豕の丸を取るを見るに
先つ其皮を墨にてたちわり玉をあらはし其を引くビライ
とて右ちきおして其痕へ塩を押込み其まゝ放しやる丸を
去りて後とはいかなるゆくゆくみれは肉よくつき脂（アブラ）もよく
なるといふ

牛は食料にするもの肥太らしむる為なるへし
阿蘭陀にてハ食料のために常に牛より羼丸
をとること也しきりに牛をハ「オス」と名け常牛ハ
「クーベースト」といふ雞なりしとなりしとそ其上脂
のよくなりし肥太らしむる為なりとかり
和蘭にて豕よりとるものハ未た少すなくの法
諸説あるなき而してハ犬をなし猶ほとなりし
犬も亦羼丸を去るといふ

馬ハ使ふハ其て武威となれハ睾丸をきる拇・耳鼻も
きこゑ世ずれハかんつうして遠通して至ら所ずとなり
但し又ゑよするハ世ちよ及ぶ事す拇指を傷ひるハ其
源よ焼布をなして拇きれ名をあつ睾丸ハ人君も
持戒の僧又音曲家杯ハ睾丸とい志先年光太夫
お語れり

拇よ睾丸をと拇きされハ男女の情念を絶つ故よ
肉勝肥腴を生ずとぞ其理深き事ハ容易ならぬ

叙さらくきまてへたるおこなへいふ故よ撓めても入りもの
如く伸ひゆまなるぞ又おハなくて先年の方説利
なりあるぞ突き透きをこれ其月をなすものなや
人ハ正月よ年の改りなる時ハこれしゃ年をまねし
時とハ志ん原の誕辰よあつりし其あくる日より一ツ
増して其年齢を称するぞ此時年をきする日とて
各生れ日を称するぞ此ことへハ丈業の人二月晦
其生日なれハ二月晦までそ正歳となり翌日なハ

廿年と一月より此三月六日に至れハ廿年と壱ヶ月
二日となるへし夫九死去して享年を碑に彫り付る
も只拾壱年幾ヶ月幾日と摘し書するなし
斯にこれ凡て欧邏巴洲の風俗と見ゆ西洋中
にて死去し出家の悟達者に葬埋せし
甲必丹（カピタン）「ジユールコープ」の碑面を見しに享
年何年幾月幾日と記せり扨生辰を祝
ふハ和漢ともに年始をもつて算すなれとも其月を

以て齢を立る時ハ定めす然れハ十二月に
生れてハ翌正月ハ二年といふなり
爲れ是とするといへとも何ヶ月ハ何者か尤細し
庶にハ凡由らす
板硝子を切るにハ水晶のかき玉石にて筋を付置
たちきるなり石に非之
斯に正邦にていふギヤマンの正名ハ「ジアマン」なり
大光日オロヒイアにてギヤマンと ピリアンシと云よし

ワニガといふ病ハ北地方に多く土地沍寒の所にある
病なり常に烟草を吃する者ハ此病を防ぐといひ
傳ふ此病ハ一種悪寒の気に中るより起る病なれ
烟草ハ寒を温気を避る
の能功あるがゆへなるべし
其病ある初発ハ皺肉黒色となり
軀體手足筋脉をひきつめ肉硬くなりて色黒を
常ひ此業になり動作する能ハず苦難すと
其急をなす所多くハ膝膕なり
漂客津太夫も漂着の沖合にて此病を受たすく
みなりて一身此轉動なす能ハず漸く人の肩に
すがりて二便さへ便じより近く漕常ハ甚されとも
於今足部其急し歩行不自由久坐ハ得ならぬ
同船の内此病に罹りし者和ま三人とありき才
ホーツカ過ぎてハ常寒此州皆ハ毎く此病者のみ
多し ヤコーテ、フラーツケ等此病を患る者をみなす
常に烟草を嗜み食して預防するなりとぞいへり
土人も甚おそれをなし病患なりとされり
人齒齦腫

病する者あれをツニガそへるしや抔として人ゟなり
なおるなり

按に此病和蘭にいふシケウルボイツ」といふ病
にて其書新撰のツニガ此病を能治す是
醫宗金鑑の書に出す所の青腿牙疳なり

イルコーツカに遊楽所とゐふ酒楼ありこれをクラビセ
ライ」と名づく

大光日料理茶屋などカラニシヤウといふ或ハ芝居と

此ところハあらしやといへり

各国の名も有りて殊に大家なり酒此都も種々在
上好と称するものハアメリカハランソースケ等の
来る物にて数品あり就中葡萄酒の絶品なる
此中にハ玉突きの戯具を設けおきて此突き玉の
戯をベレヤロといふ 按和蘭にハビルヤールといふ此戯の説に詳なり 婦人と
此楼に集りて酒宴を催して歌舞遊興に下物（サカナ）
の数ハ他よりなり無に余し総て玉突の

脂質となし味となして相楽む烟
草も何遍となく席に出て酌を取れの事ハなし唯
膳にて至て百姓よりも老人に至るまで又厨に喫ム
烟草数種あり白土にて製しやきものに志
たる烟管ニ（和蘭用る所と同物也）きせるに ケタイツケタバコ（唐烟草）
を盛りてのましむ一服の價銅銭五枚なりとぞ
此遊所へ至る上等の人も来り楽む客多なり
又或ハ二三まても多くの妓を貴し使方にハ千差之

しく窮厄なる族も少なからぬよし
使官レサノット官職品級のことけたしかに不聞
按に阿蘭陀人譯文和解書上にヘール
カームルといふ主役の者なりとみえたり
職ハ外交にて内交も兼るものにや
外官にて相王の才過くも出る役義なりしとなり
此人の才策ハニヨルといふ役にて在勤なるよし
レサノットの妻ハ若よりつる イルコーツカにて卒し豪

商セリコフの娘なり縁談ありて七千里北方中
イルコーツカにありて婚姻を整へし也其妻此度
出帆の前年(戌の年)卒し都にて病死せりと德
亥年彼國年暦一千八百三年なり外国へ使者
立てし八十年始めなりと承れり
抑其意とはなりて宜和といふ事又使
船出て海上大に乱し日本へ使者出せし
事此初めなりといふ事にや昔代唐山北京

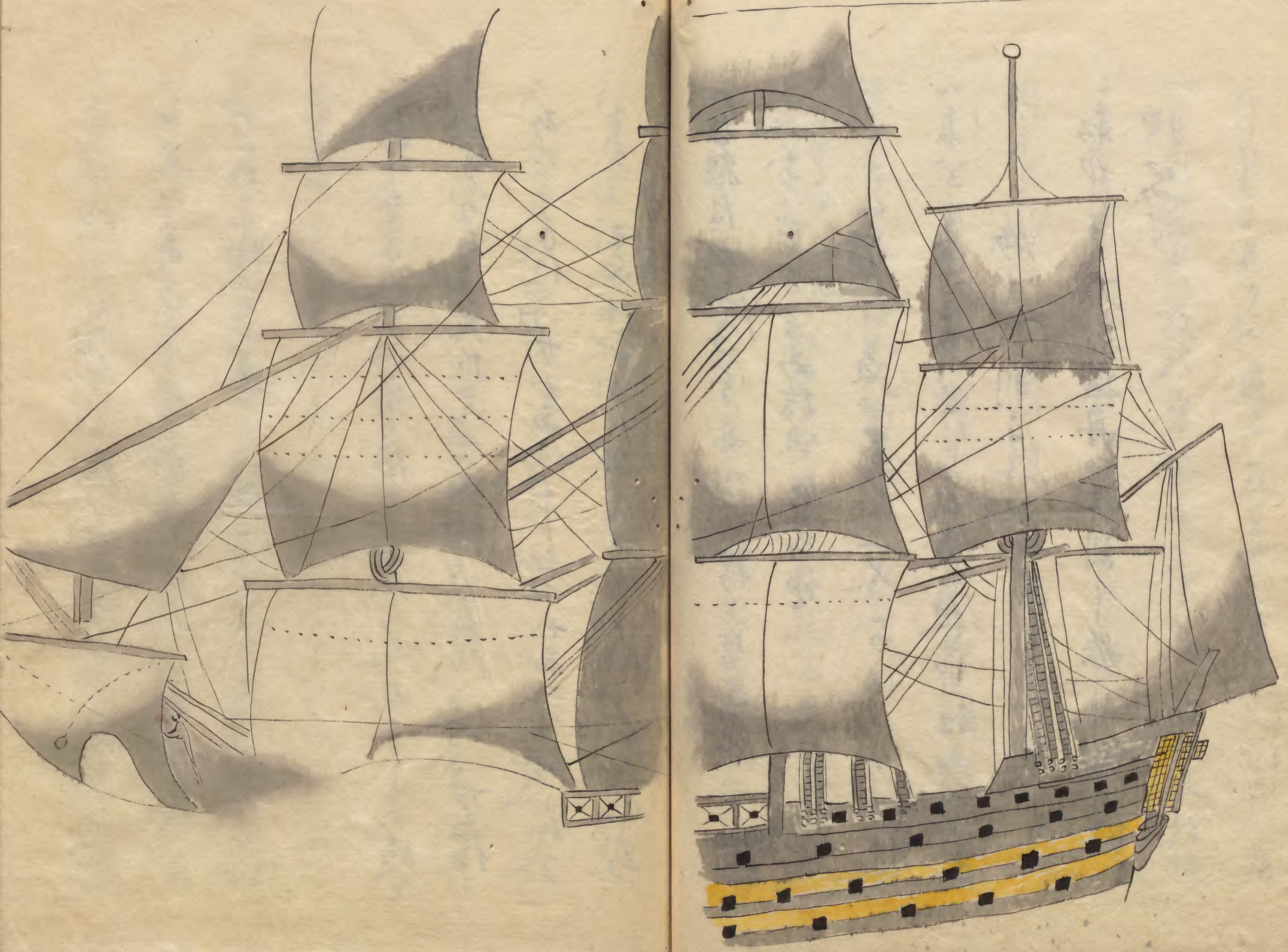
迄へ使者往来度々ありしと云伝へ
日本人ハ手堅し魯人ハ奢(カザリ)多く実少し窮(ヲシ)ハ
氷砂糖を交易相手に渡す事にて丹木片(キヽレ)なと
雑へをする所なりしき仕形なりなと噂しうりき
本国今時に至りてハ世界中遍く通路せさる
國なし但近国にてありなりしり日本へ乞ふ者
之通用なしと人々毎度噂ありしと言ける
ガラニツケ 或佐倉院 近年中乱逆国王も弑され

て其時ハ国王みつから魯西亜軍兵を遣しこれを
平均し国界に番兵を置きけり　ハラニツースケ
といへるなりしに船中にても諸役人々くとお済せり
按に近年戦争打続し風説書年々見
ゆしが王を弑せしといふハいかにや又王を
ユニゲランドに遁けのひ居たりといふ丑寅
年已来此風説云上書にも其本国断
平穏になりしと記せり右等に実否を示すも

本国より献上の阿蘭陀に託し先年か毎度上達
送進しきりしかれを毎度さし出せしと候せり
今ここに来り聞所すれハ一向不同法なもとの
増ときより出為もて大ひに勝手て貨物ハ
貴拂しなるへし其不届なる段ありと申せし其
按るにけりも亦実より其説を弁すへくりもを
ペトルブルカ　逗留中　諳尼利ユニコンプツガラフ」の近示
もて七百人乗此軍船の新造あり凡長た丈等弥もて

なりしよし長サ何遺志 百有廿八尺より八九尺もあ
へし円の方ハ松の厚板にて長さ千尋を又松板
にて張りをよこへちやんを塗りより折水へ不通り
洞にて折り芭蕉の透さぬ布にて帆柱も松
の木を用ゆ三本継キにて柱ハ家中に繰貝へハ
此をなる太サ 丈あるへし 長サ 三本松より舟
大木なき時ハ舟板
皆松なりとぞ
船中石火矢数挺を設け并船へ
上下する八艘なる船より綱階子を用ゆるなし

兵粮は二三年分舟中へ積ミ皆蒸餅のよしを
人か一月よ百五拾目宛の由
百五十匁の蒸餅一人か一日の積りにて十分
なることよし 此度の使節船に積み蒸
餅も此割にて配分せり
船中にて大新造舟の見図し悉く書あらはし
模写す



国立公文書館
National Archives of Japan

金銀借貸の證文を認る書紙あり國名双鷲
の是印ありこれを買求めて證文を認むこれなきより
て若し約定を違ひ返済せざる時ハ公辨の上嚴科
を蒙るといふ
都て奉公人ハ一年限の定めにて人物によりて給金
の多少あり大概見計ひしハ高給 日本の百両位
あるも手代 月 廿五両位より三十七両二歩位にある
下男 月 七両二歩か十両位迄 下女 月 五両位にあ

たる人を請人口入抔もありて證文もする事なり
人夫一日此雇代 日本の壱歩位にある 中人日拾
匁位に相当する下人日 弐朱位にある 此ハ下口ス
匁位にあたる 猶此手當代もあり
豪商キセロフの水車場を見て多し多くハ麦の
粉を挽臼する所なり市中近来は地をもて初めて
出来りしとて水車の激勢にて大桟木を挽
とせる所あり 廠（コヤ）此内に大鋸三十挺ありて並を盡

其れ亜へ大材木の小口をのこぎりにかけて
漸くひきわられたるを挽きこむに従ひ材木次第と
進ミ入つかるにひきわられるなり又ひきあわするに其の材
木を続け重き石をのせ挽終れハ又後をつぐ
なりされ共屋上に仕懸ありて如く堅め重きし
地底にも機轄を設けしと見えて一人丈傍
にありて挽割る板をとり片付又ひきあわするを続
けなどいふ事すこぶる也然れ共仕懸甚人力を費さず

して数枚の板頃刻の如くに挽けるなり
を仕掛の工夫水勢の種合をためし試みて考へ
百とり余も試みて仕立せしより数度見るまゝ大に違
の費用をとけ遂に如此世の大利を致せりといふ
按にペトルブルグ都府図中五十六葉に和蘭人
サアガモーレンス見せり サーガハ鋸之 モーレンスは
碾(ウス)なり水勢にて右碾旋して材木を鋸截するなり
イルコーツカにてキセロフク剣製せしものは
巧人某これを見習ひて擬せるものなるや

国立公文書館
National Archives of Japan

此工夫ハ衆を募りて起かくより此迄に年あり
ありし智人某なる者の巧めるよし其妙巧に目
を驚かしむるところを製巧見も少しとめざりし
となり起りてよりハ頻にある事なりや
此一事それもキセロフが発明を大概したる
にし莫大の費をかけし彼をして再三精巧
を加能せしめ後来西画家の大利をなし
しぬなり

殊に此巧に似たる此器「大西奇異図説」と云
書に図状せし物あり世に機智の人ありて
彼と此と考へ合せて起さんとするの
才を生ぜば此器も又ゝ良便の器
出つべきにや　蔵質　漂客等に対向の際
此記せしに論器を試んと思ひよりしハ此近頃
をさけるに今起せりなれど定身一にせる
西の大器を右のさまに図に作らしめて

なる事となしぬ但し其詳なる事を知らず。
を遠限とするのミ
此白里（シビリ）地方廣漠の地なり其故に多くハ流
刑に處せし人々を使ひしとなり此業を巧ミ
出せし流人をも此の中なるへし「イルコーツカ」滞
留せし日都の方より咎人の流刑なりとて三千
人程オホリツカの方に川纏ひ行けるを見たり彼
アウタニ」の邊より「オホーツカ・カミシヤーツカ」との

峻難の山路なとにて罪ある者をつかハせるなるにや
抑此多人数實に罪を犯せる咎人のミにハあ
らし何れとも此國と軍戰して擒とせる
兵卒なとも交りてやあらん
井戸の制ハ國に於るよりハ皆をねつるへく甚
寒中にハ川水をつかはす
婦人臙脂（ベニ）をはくるものあり紙へつけたる臙脂屋
になり

イルコーツカの内一ヶ寺涅槃像の画を掛置るを見
たり全くしやかにあるものと同し

船中華々出帆して中見ゆる新章
使節乗船表通り十四巻に為すかの如し
長三十六間余　幅拾弐間余
高拾間余　大柱三拾二間余
大さらんる縄三間　やりたし　十二間
帆数十八斤　石火矢三十六挺
船の左右此縁に石火矢十四挺ツゝ艫の櫓の上に
六挺又其上に小き石火矢二挺自在に廻轉

するに仕掛ある物あり小なれど筒長き故遠
きに達すると云ふ右石火矢ハ海上にて海戦に
備へあり左右の所にてハ筒先(キ)を揃へ並べて据
置しかの重サ二貫目が後なるへし
碇ハ二段にして大ひなるを大碇重サ「プー」上と
いふ法馬(コントウ)にて百かけといふ容易に碇を下すと
いふ事なし
使節居所ハ前生ハ二階目の座敷二十畳敷程

の所なり時ますり三階めへんかうの居間にあり艫れ
めくりて左右と上へとハ皆硝子障子之日光への
戯之物掛ハ艫の方へ掛ありて都方ハ皆表の方
居り役人ハ皆就寝へあり
水を蓄ふ家くハ舎案のごとく流れる物の内に
板中ハ卧しくりばらしくする振子さへる物之
厨(ダイドコロ)ハ也りを鹿銅にて囲こ上に烟窓あり灶ハ其
中にありて扉ありて此より出入ハきれいに蒸

炊の目ハ固く消してかりしもなく火の許らぬ
様に志べきもの也
食事刻限陸と同し九ツ時と晩と毎度之
食料ハ薑餅 豆 味噌豆のたくこ 塩 挽割蕎麦
畜足く物ハ 豕 二三十疋 牛 拾八疋
雛 二百斗 此外生て多く之し 鶏卵ハ道あらハしも主す
船底ハ八分のくだ 狭と石を並べりこの上へ飲水の樽
を並る事数百之 樽の長サハ七尺程の船ハ船中

其はおて大事に使ひ一日壱人に五合 平均ふ是
足りるは旅をまそとりかゝしも 縦へ飛ちらぬ程
志てかぬなれハ 是由ハ余自物ハ 葉沸シロミツ水のときも
其敷さも済ひしなり 右水樽此上へハ食物数
樽諸まそ並
端船ハ大艘入並
帆ハ麻ふて織らるもの也 此の方へ掛る帆ハ似程
も強きをよしとす 地細なると用ゆ

舵カミハ船よりハ見へぬ振子付けおく
其船の名を ナデミダ と以ふ これハ静謐太平
なりしを表したるよし 振子掛けり
此船の人数役人ハ九人其外ハ四十人
是あり 是しかハ
ユナラウ マヨル ニコライ バイトルイチ レサノト
是ハ此度の使節也 魯西亜人
マヨル官 三人

先使節派役のとき 臓を 石施ち持子付居る
此時より是迄の臥を勤む
其一 ヤルマノ カルライ 子イメツの人
其二 ミイトル イソノイチ ヲロミイア人
此人ハカミニャーツカより来也此地代官の重也
其三 イワン イワンマノイチ 同
これハ是迄此カペタン也右同所より入船
カペタン 二人
船此 ポーポローチクの支也

其一　イワンヒヨータロイラ　同
此人ハ幼少より舟を学ひ習ひ師となり
七ヶ年航海せしと也廣東のうきて渡
渡海せしとそ　其師匠ハアニケリ人なり
扨て名誉の人にて先年世界を廻
十三ヶ年目に帰国せしと云　船も三度
造り替しと也姓名ハ忘れたりヒヨータロイチ
は此度カナリツケ号ハ始て乗れりと也

小船頭・三人
其二　ニカル　イワイチ　ヨロミイア人
これハ羅針なとを見且海上の里数を測る
先ハ糸を流し引あけて算用して是速を知る
役子なり
其一　イワンベンプイチ　同
其二　ワシライツシライイチ　同
其三　名不覚え

下業計役　三人　羅計（ホーハリ）を見る役

其一　ヤルセノヤルマノイチ　ネイメツ人

其二　ペートロ　トロヘイチ　ヨロシイア人

携帯し世界各国の港湾海中見廻して日々各国海船の方角を定べさり中と云

其一ハ数多万里の事更に不覚と

いれハ上陸候ふ此役人て[illegible]

南京東[illegible]海路を案内して遣り

此方ハ当局ハ役料として銀四枚ほど求めたりと

其三　名遺忘

医者

三人

ドクトル　二人

是ハ信実ある医師なり御使臣の医師に

ランゾフ　イロこ　ゲレゴロイテ　此人はダニッケより参り

此人諸国の言語に通す此所に長崎まで

習ひ通辞す画も細工も好める人なり

壱人　名不知

レイカン　壱人　外科これハ位卑き医師之

壱人　名不知

コツプ　二人　兄弟也

兄ハ　十壱歳　医業見習

弟ハ　十才　方針名のミ見習

右人此両童をコツプ〱と唱へり

画師　二人

壱人　名不知　グンワケより

入船

壱人　同　ヲロシイア人

此人船中より病気ニてカミシヤーツカより

上陸後張病之石（カミニ）の如キなる病と唱へり

草木禽獣魚を吟味する役人生〻不取

此人右画師　病者の療治ニ取扱の為附添

カミシヤーツカより上陸

右の代　壱人　名不知

硫炮指南人　壱人　名不覚

此人水主の内へ鉄炮の打方等を教へ
足軽代りを勤めさする様りにて伴ひ来りしか
惰弱にて被傷多く船中使節の命に背く
事ありし故カミシヤーツカに留め置て候ておこ
カミシヤーツカより足軽を入る

足軽　六人
カミシヤーツカより入船

ヘタロス　水主也　数十人　名一々不覚　四十人
船客組皆々諸国の者なり　其中韃靼人
ありて力量衆に勝れたる者の由　此六人衆に三
人舳に二人居る　此者共の内に舟働をする
者ハ向論文者縫仕立物ニ而大工鍛冶人
の者共も兼て居る也
扨て右の人々ハ此外名の知らぬ人多けれ共
是をもあるへき様も覚えて書上けし

姓名年齢の調へ出を得てこれまて
傳写のあやまり有るを糺しつ

日本政府圖書
大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan